

引用文献一覧

Part1. 値値の再発見／Part2. 新たな価値の創造

グローカルのシンボル・灯台

池ノ上 真一

- 阿瀬真由香・藤岡洋保(2003)D.&T.スティブンソンの仕様書とR.H.プラントンが建設した灯台,日本建築学会大会学術講演梗概集,2003年9月,617-618.
- 藤岡洋保(2021)連載 建築史の世界 第12回 灯台が照らす日本の近代,コア東京 2021年1月号,コア東京WEB,一般社団法人東京都建築士事務所協会,<http://coretokyoweb.jp/?page=article&id=981>(2025年3月5日閲覧)
- 星野宏和(2025)日本の灯台の灯器(光源)の変遷,海と灯台学Journal,創刊準備号,9-11.
- 石丸優希・池ノ上真一(2025)日本の灯台の価値を可視化する~建造物編~海と灯台学Journal,創刊準備号,52-55.
- 石村 智(2025)海から見た牛窓の景観—古墳・寺院・燈籠堂—,海と灯台学Journal,創刊準備号,12-13.
- ジョン・アーリ著,吉原直樹訳,伊藤嘉高訳,モビリティーズ—移動の社会学,法政大学出版局,2015,493p.
- 栗原憲一(2025)灯台の足下から見える地球の記憶と地域の歴史との関係性,海と灯台学Journal,創刊準備号,17-19.
- 高野宏康(2025)北前船の航海を支えたランドマーク～常夜灯・日和山・灯台～,海と灯台学Journal,創刊準備号,14-16.
- 谷川竜一(2016)灯台から考える海の近代(情報とフィールド科学2),京都大学学術出版会,2016年3月

北前船の航海を支えたランドマーク

～常夜灯・日和山・灯台～

高野 宏康

- 林頤三編,河崎曾平閑(1873)「北海紀行 卷之四」,7月11日.
- 樋口忠次郎(1972)「祝津町史」,祝津郷知会,229-232p.
- 海上保安庁灯台部編(1969)「日本灯台史 100年の歩み」,燈光会,7-8p.
- 南波松太郎(1986)「日和山」,法政大学出版会,41p.
- 小樽市(1958)「小樽市史第一巻」,小樽市,裏表紙,427-429p.
- 高野宏康(2018)日和山灯台一小樽へやってきた船乗りたちのランドマーク,「小樽チャンネルMagazine Vol.33」,株式会社K2,6-7.
- 高野宏康(2023)メルヘン交差点(入船七差路),「小樽チャンネルMagazine Vol.87」,株式会社K2,10-11.
- 高野宏康(2024)小樽の常夜灯・日和山・灯台②,「月刊小樽學」通巻第187号,38-42.

灯台の足下から見える地球の記憶と地域の歴史

栗原 憲一

- 銚子資産協議会編(2023)「海×風×大地 ときどき私 15の物語とともに銚子を歩く」,銚子資産活用協議会,102p.
- 貝塚寛平・成瀬 洋・太田陽子(1985)「日本の自然4.日本の平野と海岸」,岩波書店,236p.
- 海上保安庁(2018)「海を照らして150年～航路標識の歴史と現在～」,海上保安庁,14p.
- 桑原和之・三沢博志・箕輪義隆ほか(2006)銚子市鳥類目録,我孫子市鳥の博物館調査研究報告,14,71-147.

エコツーリズムと灯台-灯台の社会的価値の把握手法の開発

海津 ゆりえ

- 海上保安庁銚子海上保安部,ホームページ,灯台の種類と歴史
<https://www.kaiho.mlit.go.jp/03kanku/choshi/inubo/lighthouse/types.htm>(2024/8/24閲覧)
- モリナヲ弥(2023)「漁民の芸術」,サンズイ舎,p.59
- 日本財団海と灯台プロジェクト(2022)「海と灯台学」,文藝春秋,152p.

産業遺産研究の論点と灯台

平井 健文

- 平井健文(2018)産業遺産保全における「場(milieu)」の象徴性としての「生活」—兵庫県生野鉱山跡の保全の実践を事例に—,地域社会学会年報,30,51-64.
- 木村至聖(2014)「産業遺産の記憶と表象—「軍艦島」をめぐるポリティクス」,京都大学学術出版会,272p.
- Sánchez-Beitia, S., Luengas-Carreño, D. and Crespo de Antonio, M. (2019) Characterisation of historical lighthouses as Industrial Heritage elements: Application to the Lighthouse of the Island of Santa Clara (Spain). WIT Transactions on the Built Environment, 191, 433-442.
- Smith, L. (2006) *Uses of Heritage*. Routledge, London, 351p.
- 谷川竜一(2016)「灯台から考える海の近代(情報とフィールド科学2)」,京都大学学術出版会,80p.
- Xie, P. F. (2015) *Industrial Heritage Tourism*. Channel View Publications, Bristol, 254p.
- Zhang, J., Cencı, J., Becue, V., Koutra, S. and Ioakimidis, C. S. (2020) Recent Evolution of Research on Industrial Heritage in Western Europe and China Based on Bibliometric Analysis, *Sustainability*, 12 (13), 5348.

景観資源としての灯台の活用可能性

榎本 碧

- Appleyard, D., Lynch, K., and Myer, J. R. (1960). *The View from the Road*. The MIT Press, Cambridge, MA, pp. 27-63.
- 観光庁(2023)旅行・観光消費動向調査.
- Gomótká, M. (2022) Geometric forms in landscape –lighthouses. Space & Form, Przestrzen i Forma 49. <http://doi.org/10.21005/pif.2022.49.D-01>.
- 北海道開発局(2020)シニックバイウェイ「秀逸な道」制度要綱.

新たな灯台の役割と地域社会

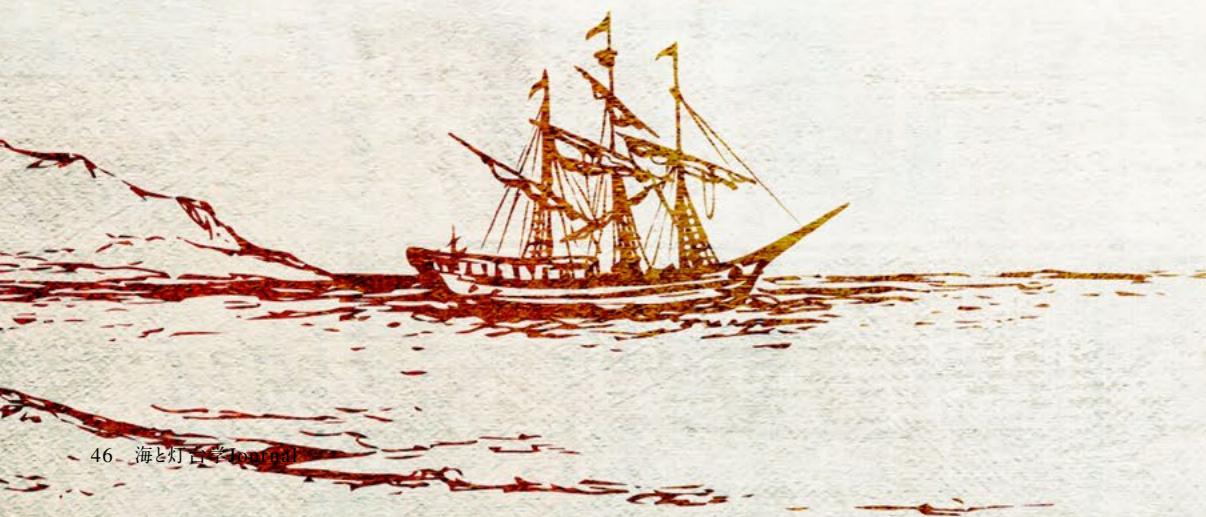
—野間埼灯台の取り組みについて—

林 達之

- 河合雅司(2019)「未来の地図帳 人口減少日本で各地に起きること」,講談社,272p.

海と灯台学 研究ノート

- 01. 灯台の保護に適用できる国際認証の比較検討
-世界遺産、無形文化遺産、ユネスコ世界ジオパーク-
- 02. 日本の灯台の価値を可視化する
~建造物編~
- 03. 灯台へ向けられた「まなざし」に見る可能性
- 04. 心象風景・地域の象徴としての「灯台」
~シーニックバイウェイ北海道 函館・大沼・噴火湾ルートでの取り組み~



灯台の保護に適用できる 国際認証の比較検討

-世界遺産、無形文化遺産、ユネスコ世界ジオパーク-

Comparative study of international certifications that can be applied for the protection of lighthouses:
World Heritage, Intangible Cultural Heritage, and UNESCO Global Geoparks

中村 真介 -Shinsuke NAKAMURA-
(株式会社ジオ・ラボ 一般社団法人北海道三笠観光協会)

栗原 憲一 -Ken'ichi KURIHARA-
(株式会社ジオ・ラボ 一般社団法人日本海洋文化総合研究所)

石村 智 -Tomo ISHIMURA-
(独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所 一般社団法人日本海洋文化総合研究所)

池ノ上 真一 -Shinichi IKENOUE-
(北海商科大学 一般社団法人日本海洋文化総合研究所)

[キーワード] 灯台、国際認証、世界遺産、無形文化遺産、ユネスコ世界ジオパーク

Keywords: Lighthouse, International certification, World Heritage,
Intangible Cultural Heritage, UNESCO Global Geopark

はじめに 大切な遺産を守り、未来へ継承するための手段として、国際機関の実施するプログラムに基づく認証（以下、国際認証）を受けることが考えられる。国際認証を受けることを通じて、その遺産の価値を客観的に説明することができるようになり、また、その遺産の保護や管理について多様なステークホルダーの間で議論を交わし、価値観を共有する契機となる（渡辺ほか、2008）。

日本の灯台については、これまで海上保安庁燈台部（1969）をはじめ数々の記録と研究が重ねられてきたものの、その学術的な価値づけや保護に向けた動きは道半ばであり、国際認証を受けることでこれらの動きを加速することができると考えられる。

そこで本稿は、複数の国際認証を比較検討することで、灯台の保護に適用できる国際認証を導き出す一助とすることを目的とする。

検討の方法・材料 国際認証には、世界遺産、無形文化遺産、ラムサール条約登録湿地、生物圏保存地域（ユネスコエコパーク）、ユネスコ世界ジオパーク、世界の記憶、世界農業遺産など多様なものが存在し、それぞれ目的や対象、制度が異なる。以下では、灯台またはその関連遺産を保護するのに有用と考えられる、世界遺産・無形文化遺産・ユネスコ世界ジオパークの3つの認証に絞って比較検討することとする。

なお、複数の国際認証の比較については田中（2016）などの例があるが、本稿では制度的な側面を中心に検討を加えることとする。

それぞれの国際認証の制度的な特徴

3つの国際認証にはそれぞれ、表1に示すような制度的な特徴が挙げられる。

表1.世界遺産・無形文化遺産・ユネスコ世界ジオパークの制度的特徴

	世界遺産	無形文化遺産	ユネスコ 世界ジオパーク
典拠	世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約	無形文化遺産の保護に関する条約	国際地質科学ジオパーク計画
事務局	ユネスコ	ユネスコ	ユネスコ
開始年	1972年条約採抲	2003年条約採抲	2015年開始 (世界ジオパーク認定は2004年開始)
登録件数	1,223件(168ヶ国)	788件(150ヶ国)	213地域(48ヶ国)
日本での登録	1993年以降,計26件	2008年以降,計23件	2009年以降,計10地域
主な登録対象	文化遺産 (建築物,彫刻・絵画,洞穴住居,建造物群,考古学的遺跡,文化的景観など) 自然遺産 (地質学的・地形学的形成物,脅威にさらされている動植物の生息地・自生地など)	a. 口承による伝統及び表現 b. 芸能 c. 社会的慣習,儀式及び祭礼行事 d. 自然及び万物に関する知識及び慣習 e. 伝統工芸技術	国際的な地質学的重要性を有するサイトや景観が,保護・教育・持続可能な開発が一体となった概念によって管理された,単一の,統合された地理的領域
他の登録物件との比較の必要性	顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value)の証明が必要	必ずしも求められていない	国際的な地質学的重要性の説明が必要
地域社会参画の必要性	登録プロセスにおいて地域社会の参画は必要	関係する社会・集団・個人の幅広い参加と同意は登録要件の1つ	地域社会や先住民の巻き込みは認定基準の1つ
登録までの主なプロセス	・暫定一覧表への記載 ・専門機関の現地調査 ・政府間委員会の決定	・専門家の机上審査 ・専門機関の現地審査 ・政府間委員会の決定	・政府間チェック ・専門家の現地審査 ・ユネスコ執行委員会の最終決定
登録後の義務	6年毎の定期報告	6年毎の定期報告	4年毎の再認定審査 (現地審査を伴う)

（各国際認証の公式情報をもとに著者作成。登録件数は2024年末時点のもの）

1. 世界遺産

世界遺産は、条約に基づく国際認証であり、事務局は国連教育科学文化機関（以下、ユネスコ）が担っている。その歴史は50年以上に上り、その間に160ヶ国以上で1,200件を超える遺産が登録されるなど、3つの認証の中では最も歴史が長く登録国数・件数ともに最多である。日本が条約に加わった時期は比較的遅く、1993（平成5）年以降現在までに26件が登録されている。

登録対象の範囲は幅広く、建築物や彫刻・絵画などの文化遺産から、動植物の生息地・自生地などの自然遺産、そして両方の要素を兼ね備えた複合遺産にまで及ぶ。対象はもの場合も区域の場合もあるが、いずれも有形のものである。最大の特徴は顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value）の考え方であり、人類共通の遺産として将来に向けて守る価値がどこにあるのか、世界中の類似遺産との比較を踏まえて証明することが求められる。

他の2つの認証と異なり、登録申請に先立って暫定一覧表への記載が必要であり、すぐには登録申請できない点も特徴である。登録審査では専門機関による現地調査が行われ、最終決定は政府間委員会で行われる。

2. 無形文化遺産

無形文化遺産もまた、条約に基づく国際認証であり、事務局はユネスコが担っている。21世紀に入ってから誕生しておりその歴史はまだ短いものの、約20年の間に150ヶ国で700件以上が登録されている。日本は当初から条約に加わり、現在までに23件が登録されている。

登録対象は口承や芸能、祭礼、伝統工芸技術など幅広いが、いずれも物質的なものではない、無形

のものであることが特徴である。また世界遺産と異なり、普遍的価値の証明や他の遺産との比較検証は必ずしも求められていない。

他の2つの認証と異なり現地調査は行われず、机上審査のみで判断される。専門家による審査を経て政府間委員会で最終決定される流れは、世界遺産と同様である。

3. ユネスコ世界ジオパーク

ユネスコ世界ジオパークは、条約ではなく、ユネスコのプログラムに基づく国際認証である。開始は2015（平成27）年と新しいものの、それに先立つ2004（平成16）年にユネスコの支援の下で世界ジオパークの認定が始まられたため、無形文化遺産同様、約20年の歴史を有する。40ヶ国以上で200を超える地域が認定されており、日本では10地域に上る。

その中核となるのは地質遺産だが、保護だけでなく教育や持続可能な開発も含めた包括的な概念による管理が謳われるなど、汎用性は高い。また、認定の対象は地質遺産そのものではなく、地質遺産やその周囲の住民の居住域を含めた区域である。世界遺産のような普遍的価値は求められないものの、国際的な地質学的重要性の説明が求められる。

ユネスコ世界ジオパークの認定プロセスは、他の2つの認証に比べユニークである。政府間委員会は設置されておらず、代わりに、他国の政府が申請に対し異議を申し立てられる期間が設けられている。実質的な認定可否の決定は専門家間で行われるもの、最終的な決定は、ユネスコで総会に次ぐ意思決定機関である執行委員会に委ねられる。また、4年毎に現地審査を伴う再認定審査が行われることも大きな特徴である。

灯台の保護に適用できる国際認証の比較検討

1. 登録の対象

3つの認証の最大の違いは登録対象、即ちその国際認証が保護しようとしている対象にある。

対照的なのが世界遺産と無形文化遺産で、世界遺産では建築物など有形のものを対象とすることから、灯台に用いられている建築技術や、技術史上における位置づけなどが焦点となることが想定される。一方、無形文化遺産では灯台にまつわる無形の文化を対象とすることから、海に関する伝統的な知識や慣習、航海の安全にまつわる口承や表現などが焦点となることが想定される。

また、地質遺産を中核とするユネスコ世界ジオパークでは、灯台の立地基盤である地質や地形が対象となり、灯台は必ずしも主役とはならない可能性がある。また、特定の区域が認定対象となるため、全国の灯台を集合的に扱うことは難しい。

2. 登録に伴う負担やハードル

3つの認証の間では、他の登録物件との比較の必要性、登録までのプロセスや登録後の義務など、制度面でも多くの違いが認められる。

他の登録物件との比較の必要性の面では、世界遺産には顕著な普遍的価値の証明が求められ、高いハードルが課せられる。ユネスコ世界ジオパークも同様に、国際的な地質学的重要性の説明が求められる。一方、無形文化遺産では他の2つの認証ほどの負担感はない。

登録までのプロセスや登録後の義務の面では、世界遺産は暫定一覧表への記載が必要となることもあり、全体のプロセスが長期化する傾向にある。また、ユネスコ世界ジオパークは認定後も4年毎に再認定審査を受ける必要があるなど、認定後の負担が大きい。一方、無形文化遺産では現地調査がない点で受け入れ側の負担は相対的に小さく、また、登録までのプロセスも比較的簡潔である。

まとめ

以上の比較検討から、登録に伴う負担やハードルのみを考えた場合、3つの認証の間では無形文化遺産に一定の優位性が認められる。但し、無形文化遺産の対象は灯台にまつわる伝統や無形の文化であり、必ずしも有形のものとしての灯台を守ることにはならない点に注意が必要である。

灯台には、建築物としての側面だけでなく、航海の安全に携わってきた歴史的な側面、地域社会の中で培ってきた伝統の側面、立地に関わる地質・地形的な側面などがあり、そのどれに焦点を当てどれを保護するかによって、適した国際認証は異なる。

また、無形文化遺産とユネスコ世界ジオパークに顕著に見られるように、近年は多くの国際認証で地域社会参画の重要性が訴えられており、それぞれの灯台の立地地域のステークホルダーと対話を重ねながら、保護すべき灯台の側面をともに考えることが重要である。



引用文献

- Anonymous (2024) Operational Directives for the implementation of the Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage. https://ich.unesco.org/doc/src/ICH-Operational_Directives-10.GA_EN.pdf [Cited 2025/2/2].
- 海上保安庁灯台部編 (1969) 「日本燈台史」。社団法人燈光会, 674p.
- 田中俊徳 (2016) 國際的な自然保護制度を対象とした国内ネットワークの比較研究—世界遺産条約、ラムサール条約、ユネスコMAB計画、世界ジオパークネットワーク—。日本生態学会誌, 66, 155-164.
- UNESCO (2015) Operational guidelines for UNESCO Global Geoparks. <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000391354> [Cited 2025/2/2].

- UNESCO (n.d.) Intangible Cultural Heritage. <https://ich.unesco.org/> [Cited 2025/2/2].
- UNESCO (n.d.) International Geoscience and Geoparks Programme. <https://www.unesco.org/en/iggp> [Cited 2025/2/2].
- UNESCO (n.d.) World Heritage Convention. <https://whc.unesco.org/> [Cited 2025/2/2].
- UNESCO Intergovernmental Committee for the Protection of the World Cultural and Natural Heritage (2024) Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention. UNESCO World Heritage Centre. <https://whc.unesco.org/document/203803> [Cited 2025/2/2].
- 渡辺悌二・海津ゆりえ・可知直毅・寺崎竜雄・野口健・吉田正人 (2008) 観光の視点からみた世界自然遺産。地球環境, 13, 123-132.

日本の灯台の 価値を可視化する ~建造物編~

The Visualization of the Value of Japanese Lighthouses:
Focus on Architectural Structures

石丸 優希 -Yuki ISHIMARU-

(一般社団法人日本海洋文化総合研究所)

池ノ上 真一 -Shinichi IKENOUE-

(北海商科大学 一般社団法人日本海洋文化総合研究所)

[キーワード] フレームワーク、建築

Keywords: Framework, Architecture

背景・目的

GPSなど方位測量システムの発達により、光波標識である灯台の存在意義が揺らいでいる。役割喪失により灯台が解体される例も少なくない。しかし、灯台の素材や技術、意匠などは、建設当時の技術や海と人の関わりの歴史を伝える重要な資料であり、近年その利活用も進んでいる。そのため、次世代にその価値を継承するためには、灯台の建造物としての価値を再評価し、保存・保全の価値基準や利活用の方策を検討することが必要不可欠な課題であると考える。

先行研究には、谷川（2016）があり、アジア・太平洋地域の年代別灯台数や点灯地域の分析を通じて、近代日本における灯台の意義及び役割を明らかにしており、本稿においても分析の枠組みや内容について援用した。ただ、国内灯台の独自性や本稿が目指す全国の灯台における保存・保全の価値基準や利活用についての議論は不足している。また、大槻（2006）による全国灯台のデータベース化や鈴木（2021）の形状や配色等について検討した研究があるが、建築や土木の視点で日本における灯台建設の意義や価値を論じたものは見当たらない。

そこで本稿では、前述の課題解決に資するために、全国各地の灯台を総合的に捉え、灯台の建造物としての価値を見る化し、利活用に資する指針等を導き出せる分析のフレームワークを抽出することを目的とする。

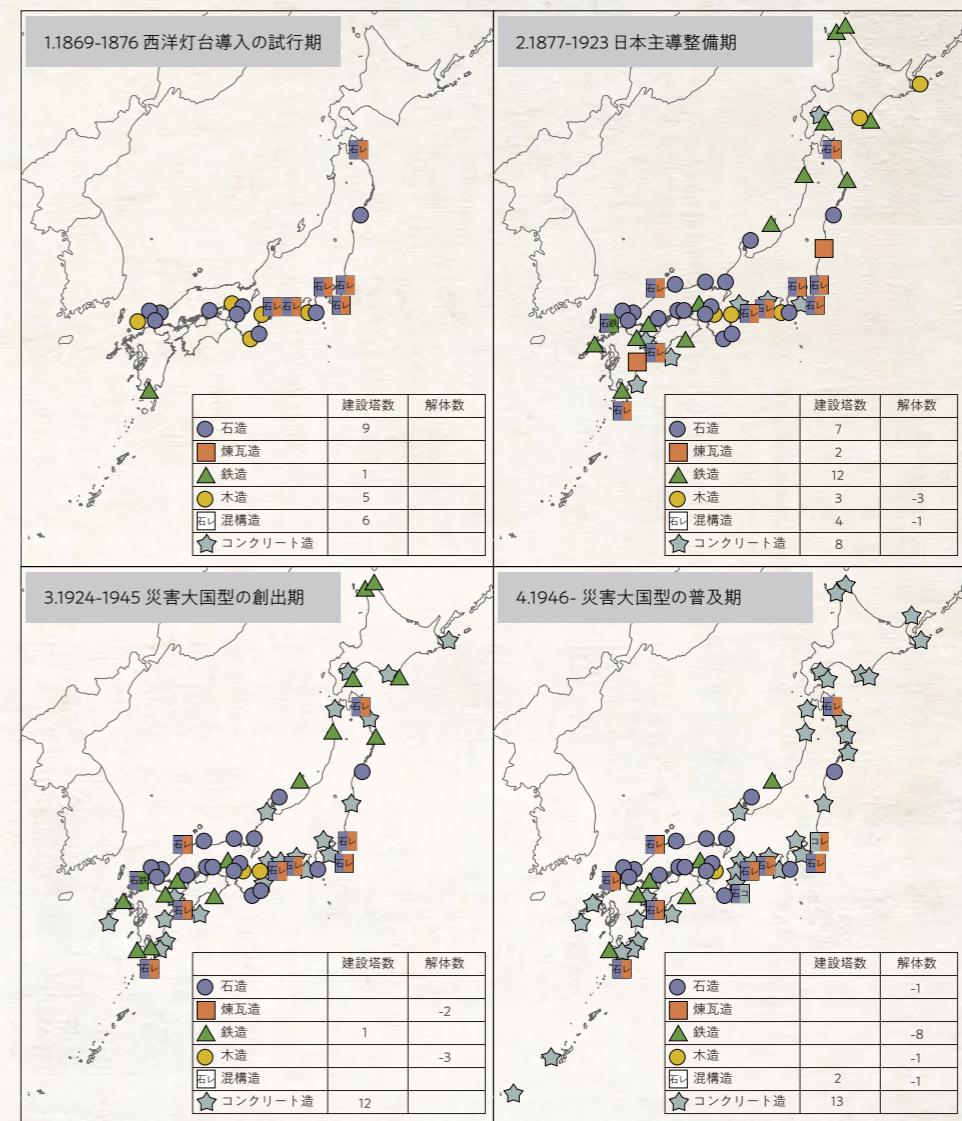
研究の方法

本稿では、前述の目的を達成するため、以下のとおりの手順を行った。

01 国内灯台の設置に関して、初点灯年¹、立地、主体、構造、素材、施工技術といった建築的要素や、社会的背景、建設目的など条件の違いに着目した。その上で、灯台がどのように発展したかという建築史学の視点と、灯台がいかなる手段で建設されたかという建築計画学の視点の2つを用いて、灯台の建造物としての価値を捉えるためのフレームワーク抽出を試行した。ただし、今回サンプル調査とし対象とした灯台は、文化庁による重要文化財、登録有形文化財、史跡に該当する灯台（以下、文化財灯台とする）、及び公益社団法人燈光会の「全国の主な灯台」とした²。文化財灯台35基、全国の主な灯台42基、その内重複は11基のため計66基を対象とした。

02 上述2視点からの分析結果をもとに、対象灯台の中から観音崎灯台や角島灯台といった一定の価値評価がある灯台をもとに抽出したフレームワークの有効性について考察し検証した。

図1. 灯台建設の変遷図



分析1

ここでは対象灯台について、建築史学の視点から、灯台建設がいかなる目的で行われたかを明らかにした。社会的背景の変化と立地、建設の経緯、対象灯台の特徴の関係を鑑みて、大きく4つの段階で変遷を区分することができた（図1）。

1. 西洋灯台導入期（1869～1876年）

日本の開国後、ヨーロッパの技術を導入し灯台が建設された時期である。これまで日本には存在しなかった世界システムを導入するにあたり、フランスやイギリスの「お雇い外国人」が大きな役割を果たした。この時期の特徴は大きく2点。まず、九州北部・瀬戸内海・関東エリアに多く建設された。ヨーロッパとの定期航路設置により、上海や香港

から関東に至る航路の安全を確保するためである。次に、木造、石造、鉄造、混構造（石・煉瓦）の4種類が採用された。イギリスの土木技術者で明治初期に国内灯台建設の指揮をとったリチャード・ヘンリー・プラントン（以下、プラントン）は、立地や経済条件に応じ多様な資材で灯台建設を行った。

2. 日本主導整備期（1877～1923年）

外国技術者が帰国し、日本の技術者による灯台建設が進んだ時期である。この時期の特徴は、2点ある。ひとつは、日本海側や北海道に灯台が多く建設されたことである。大陸や北方圏への政財界の関心の高まりを受け国内航路の整備が進み、また戦争を経て南樺太などでも灯台が建設された。もう

1) 建設年度が明らかな灯台は限定されていたため、便宜上初点灯年を用いて灯台の建設変遷を辿ることとした

2) 今後調査塔数を増やすことを前提としながらも、最低限の灯台数で傾向を把握するために、建造物として客観的に価値づけられている文化庁重要文化財等登録灯台と、全国の灯台を網羅的に把握している燈光会により紹介されている灯台を調査対象とした

分析1

ひとつは、コンクリート造³が採用され始めたことである。コンクリートが西欧諸国で工業的に生産されるようになったのは1900年代だが、耐火性・施工性に優れており、日本にも持ち込まれ、国内での普及に先駆けて灯台に採用された。

3. 防災型創出期（1924～1945年）

関東大震災や戦争により多くの灯台が破損・倒壊した際に新設された灯台は、ほぼコンクリート造であった。コンクリートは、耐久性に優れているだけでなく、戦時中においても石や煉瓦に比べて調達が容易であったことから、灯台の主要な建材として使用された。しかし、当時のコンクリート造灯台の設計及び施工技術は未だ成熟しておらず、特に灯台は海沿いの僻地に建設されることが多かったため、塩害対策や施工時に必要な真水の調達手段な

分析2

ここでは対象灯台について、建築計画学の視点から文献調査をもとに、灯台建設を行う手段に関する選択がいかに行われたかを明らかにした。具体的には、構造別に設計や施工時になされた判断や工夫及びその理由について、文献にて明確なものは記載し、不明なものは文献の文脈や他の情報から推測し整理した⁴。（表1）例えば、石造り灯台については、本州の南・東岸は安山岩、一部東北地方産の凝灰岩、瀬戸内海や九州では花崗岩が採用された。現在では輸送技術の発達により、石材は機械や車両で運搬可能だが、当時は船や人力による運搬が主で、現地に近い石切場から調達した。そのため、灯台に使用された石材には地域の石の

考察

分析1で行った時代区分に基づき、各灯台の建造物としての特徴を形成する背景要素を整理し、国内灯台の価値を捉える視点を体系化した（表2）。

例えば、強度保持に着目すると、煉瓦造灯台ではフランス技師フロンが監督した灯台がフランス積みや平積みであるのに対し、プラントンや日本人による建設灯台はイギリス積みである。当時、日本は灯台の建設技術を持たず、西洋灯台導入の試行期の日本では、海外技術者の指導を受けたため、技術者の母国文化が灯台建設に影響を与えたと推察する。その後犬吠埼灯台や御前崎灯台では、西洋に

ど、厳しい環境条件に対応する必要があった。そのため、施工における技術的課題の解決には多くの試行錯誤が行われ、特に耐久性を確保するための技術改善が重要なテーマとなった。

4. 防災型の普及期（1946年～）

戦後の再整備期で、新規灯台は全てコンクリート造であった。さらに、多くの既存の木造や鉄造の灯台も、建て替えによりコンクリート造となった。このため、現存する灯台を外観すると、西洋灯台導入期に見られた灯台の構造的な多様性は大幅に失われた。ただし、近年になり、海上保安庁によるデザイン灯台の推奨など、地域のまちづくりとの連携を図る取り組みが促進されており、新たな多様性創出の機会となっている。

特徴が反映されている。また、明治初期には、スチブンソン兄弟⁵の設計図を基にした灯台建設や、日本の工部省が雇った外国人技術者による煉瓦製造の指導、セメントモルタルの代替素材として石灰モルタルを使用するなど、日本が灯台建設の技術を持たなかつたために西洋技術の導入や代替が行われた。煉瓦製造技術の伝播は、灯台のみならず多様な建造物への煉瓦使用を促す契機となり、日本の建築史における重要な出来事であったと考察できる。また、石灰モルタルの使用など、当時特有の建材や技術が採用された点は、その時代特有のものとして、価値を高める要因となり得る。

は見られない二重殻構造が導入された。耐震のためであるのか除湿のためであるのか、目的は明らかではないが、これは地震国という環境に適応するために独自に模索されたのではと考えられる。その後、災害大国型の創出期及び普及期にかけて、使用素材そのものがコンクリートへと移行した。

また、北海道で鉄造灯台が多く建設された背景には、建設が進んだ時期と製鉄業の興隆が重なっていたことがある。運搬が容易で取り扱いやすい鉄材は、石切場が少なく資材が限られており、雪により冬季の施工が困難な北海道において最適な素材であった。

3) 無筋コンクリートおよび鉄筋コンクリート造を一括してコンクリート造と定義し整理した

4) 表1において、文献で明らかでない情報については、「仮」として記載した

5) スチブンソン兄弟は、エディンバラの北部灯台委員会の技師であり、駐日公使のハリー・バークスからの依頼により、日本の灯台建設の事務全般を担当した。プラントンを採用し日本に送り込んだ人物である

表1. 構造別設計判断内容の整理表

構造	判断・工夫	判断・工夫の理由	背景要素
石造	建設地付近から産出する花崗岩などを使用	建材に適し且つ運搬距離を短くするため	地理条件
	石材の厚さ・幅を均一に算出	仮構造強度を保つため	資材輸送合理性
	切り石積み工法の採用	仮荷重に耐えうるため	強度保持
煉瓦造	工部省雇いの外国人の指導による煉瓦製造	国内製造がなく技術者がいないため	国内技術不足
	石灰モルタルを使用	セメントモルタル未普及のため	国内技術不足
	国内の土で煉瓦を焼成して使用	輸入材が高価であるため	予算
	フランス積みの採用	仮構造強度を保つため	強度保持
	イギリス積みの採用	仮構造強度を保つため	強度保持
	二重殻構造の採用	仮構造強度を保つため	強度保持
鉄造	スチブンソンによる設計	国内に設計者がいないため	国内技術不足
	輸入材を使用	国内製造技術・供給力不足	国内技術不足
	崖地など危険な場所に使用	運搬・施工が容易なため	地理条件
	北海道の多くで採用	現地資材無・鉄工業興隆のため	地理条件・産業興隆
木造	垂木・間柱は設計より太く設計	構造強度を保つため	強度保持
	北海道の多くで採用	寒冷期を避け施工可能なため	気候
	国内向け灯台で多く採用	低予算で施工可能なため	予算
コンクリート造	建替時にコンクリート造を採用	構造強度を保つため	強度保持

表2. 国内灯台の価値を捉える視点

背景要素	構造	区分	判断・工夫
強度保持	石造	ab	石材の厚さ・幅を均一に算出
	石造	ab	切り石積み工法の採用
	煉瓦造	a	フランス積みの採用
	煉瓦造	b	イギリス積みの採用
	煉瓦造	ab	二重殻構造の採用
	木造	a	垂木・間柱は設計より太く設計
	コンクリート造	cd	建替時にコンクリート造を採用
国内技術不足	煉瓦造	a	工部省雇いの外国人の指導による煉瓦製造
	煉瓦造	a	石灰モルタルを使用
	鉄造	a	スチブンソンによる設計
	鉄造	a	輸入材を使用
地理条件	石造	ab	建設地付近から産出する花崗岩などを使用
	鉄造	ab	崖地など危険な場所に使用
	鉄造	b	北海道の多くで採用
産業興隆	鉄造	ab	北海道の多くで採用
予算	煉瓦造	a	国内の土で煉瓦を焼成して使用
	木造	b	国内向け灯台で多く採用
気候	木造	b	北海道の多くで採用

結論

以上のように、灯台建設は時代背景や国家間の関係、国内の状況等と密接に関連しており、これらの要素を総合的に考察することが重要である。本論では、灯台の構造部分に着目し整理したが、今後の研究においては、設備や意匠など視点の追加ならびに、対象灯台の範囲拡大を通じて、フレームワークの精度向上及び改良を図ることを検討する。

謝辞

下関市教育委員会教育部文化財保護課の高月鈴世氏、第七管区海上保安本部の皆様には、調査遂行にあたり多大なご協力をいただきました。ここに深謝の意を表します。また、大内さおり氏には、日々温かい励ましとサポートをいただきました。本当にありがとうございました。

引用文献

- 大槻達夫（2006）灯台の保存活用に関する研究：我が国における灯台の現状、建築、2006, 395-396.
- 大槻達夫（2008）地域的視座からみた灯台の役割に関する研究、建築、2008, 399-400.
- 鈴木凜香（2021）灯台の多目的利用の促進に関する研究—灯台50選と北海道の灯台を対象として、建築、2021, 17-18.
- 谷川竜一（2016）「灯台から考える海の近代」、京都大学学術出版会、80p.

灯台へ向けられた 「まなざし」に見る可能性

The Potential Seen in the Gaze Toward the Lighthouse

其力干 -QILIGAN-

(北海商科大学大学院)

池ノ上 真一 -Shinichi IKENOUE-

(北海商科大学 一般社団法人日本海洋文化総合研究所)

[キーワード] 観光のまなざし、灯台観光、海洋文化

Keywords: Tourist gaze, Lighthouse tourism, Maritime culture

灯台に向けられたまなざし

灯台は歴史的に「航路標識」としての機能を果たしてきたが、近年はその役割が多様化し、観光資源や文化的・教育的な価値を持つ存在へと変化している。

日本においては、明治期以降、「灯台の父」リチャード・ヘンリー・ブラントンの指導のもとで近代灯台の整備が進められた。他方で、羽成（1889）による「東海名勝銚港案内」や、東京鉄道局（1929）による房総半島の観光名所を案内した文献で犬吠埼灯台が紹介されるなど、当初から観光や文化的価値が評価されており、デスティネーション（観光地）としての灯台への価値評価があったことが分かる。

さらに、1980年代から1990年代にかけて、多くの灯台が文化財として保存されるようになり、文学や映画の題材としても取り上げられ、「孤独」「郷愁」「歴史の証人」といった感情を喚起する場所

観光のまなざし論の視座

1. 灯台と観光のまなざし

ジョン・アーリの『観光のまなざし (The Tourist Gaze)』は、1990（平成2）年に提起されて以来、観光研究においては、様々な分野の様々な脈略や方法で援用・応用されており、観光研究の最も重要な文献の一つとして捉えられている。Urry and Larsen（2011）は、「観光」について「ふだんの日常生活と非日常の二項区分を基調にして発生する」とし、それをながめる「まなざし」は、「社会的に構成され制度化されて」いて「観念、能力、願望、期待などの特定のフィルターを通してであって、しかも社会階層とか性差とか国民性とか年齢と

となった。2000年代以降、灯台観光はさらに活発化し、「恋する灯台プロジェクト」（2016年～）のようにロマンティックな観光スポットとしてのプロモーションも展開されるようになった。加えて、灯台守体験ツアーやナイトツアーなど体験型観光が注目されるようになり、訪問者が灯台をより身近な存在として捉える機会が増えてきた。

また近年では、アニメ・映画の「聖地巡礼」の対象として灯台が注目されるほか、震災復興のシンボルやエコツーリズムの拠点としての役割も見られる。例えば、アニメ映画『天気の子』に登場した犬吠埼灯台はファンの訪問を促し、また屋久島の灯台は環境保全活動と結びついた観光資源としての位置づけを持つようになっている。こうした灯台へのまなざしの変化は、「機能的な施設」から「歴史的・文化的価値を持つ対象」へ、さらには「象徴的な存在」へと発展していることを示している。

か教養などでそれは定まっていく」とする（須賀、2020）。

しかし、安村ほか（2011）は上記の理論を「西欧中心主義的で感情分析が欠如」と批判している。例えば、千葉県・犬吠埼灯台の「日の出聖地」化について、日本人をはじめアジアにある「初日の出信仰」という文化的文脈抜きに説明できない。また、土井（2014）が指摘する「まなざしの感情的次元」は、灯台前でプロポーズするカップルの「永遠の愛」という願望投影に現れている。本稿では、灯台に向けられたまなざしを読み解く視点の重要性を提起したい。そこで以上の議論を踏まえ、次の枠組みを用いて灯台へのまなざしについて読み解いた。

2. 観光のまなざしの種類

Urry（1990）は、観光客からのまなざしの特徴として、次の6つを挙げている。①「無比なもの」（エッフェル塔、エンパイアステートビル、バッキンガム広場、グランドキャニオン、ケネディ大統領が暗殺された場所など、誰もが知っているという前提があるがゆえに、一生に一度でもいいから見てみたいという欲求が働き、聖地化される）、②「特殊な記号」（典型的な英國の村、典型的なアメリカの摩天楼、典型的なドイツのビヤガーデン、典型的なフランスのシャトーなど、対象を記号のシニファンとして見るという形）、③「見慣れた

物の見慣れていない面を見る」という事例（博物館での展示物）、④「普通でない文脈で展開される普通の社会生活を見る」事例（かつての中国観光）、⑤「通常でない視覚環境のなかで、見慣れた仕事や行動をする」という事例（異なる視覚的背景において行われるスポーツ、ショッピング、飲食など）、⑥「特別な記号を見るという行為（月の石や有名な画家の絵画など、記号として特別な意味を与えられることによって初めてまなざしが向けられる）（土井、2014）。以上を踏まえ、本稿では、灯台へのまなざしの変遷をこの6つの特徴から分析し、可能性について考察した。

灯台への「まなざし」の変遷と影響

灯台へのまなざしの地平

そこで、日本における観光のまなざしが顕著な犬吠埼灯台を対象に、まなざしの変遷について見ていく。主に、まなざしを確認したのは、旅行ガイドブック『るるぶ千葉房総』（1991～2023年発行のもの）をもとに、犬吠埼灯台についての紹介内容について分析した。その変遷を見てみると、1990年代には「太平洋の荒波が打ち寄せる灯台」（『るるぶ千葉房総』1994）として、犬吠埼そのものの自然名勝としての評価が強く、「白亜の灯台は犬吠埼のシンボル」（『るるぶ千葉房総』1998）として紹介されていた。また、灯台については、歴史的価値について言及されていた。2000年代以降は、「銚子の海を見守る白亜の灯台」（『るるぶ千葉房総』2000）として、より歴史的・文化的な視点からの紹介が増えている。また、2010年代以降には「関東最東端の日の出が見られる場所」としての聖地的な価値が強調されるようになった。そして、銚子電鉄や自家用車でのシーサイドドライブなど、移動手段と組み合わせた体験方法の紹介が見られる。さらに、SNS

本稿では、灯台への観光のまなざしについて、とくに犬吠埼灯台に着目し、その変遷を追いかけた。そこで分かったことは、①観光をとおした地域との接続、②観光スタイルの変化に伴う灯台の価値の再解釈、であった。冒頭に述べたとおり、灯台そのものは、航路標識という「機能的な施設」として建設されたが、観光という現象を通じて、「歴史的・文化的価値を持つ対象」へ、さらには地域にとって「象徴的な存在」に再解釈されることで、新たな価値が創造してきた。

灯台観光の発展は、地域振興や環境保全の観点からも新たな可能性を持つ。実際に、日本財團の「海と灯台プロジェクト」をはじめ、灯台を活用した地域イベントの開催や、地元の特産品と連携した観光プログラムの開発、宿泊施設やアートスペースとしての整備が全国で始まっている。

近年、日本各地では人口減少が深刻化しており、地

の普及とともに「インスタ映え」する景観としての灯台の価値が高まり、特に夜間のライトアップや絶景ポイントの写真が観光誘致に活用されるようになった。

このように、限られた期間ではあるが、犬吠埼灯台へのまなざしは、時代とともに変化したことが分かる。当初の房総半島や犬吠埼の自然名勝としての評価は、②「特殊な記号」としてのまなざしであると捉えられる。次に、灯台や地域のストーリーへの移行は、全国にある灯台ではあるが、より深い情報へアクセスしたいというニーズの表れといえ、③「見慣れた物の見慣れていない面を見る」への移行である。近年の観光客自らが聖地を巡る体験を重視する傾向は、⑤「通常でない視覚環境のなかで、見慣れた仕事や行動をする」である。以上のとおり、灯台は時代背景の変遷と共に、異なる視点によって再解釈されてきた。こうした変遷は、観光客のまなざしが単なる視覚的対象の享受にとどまらず、灯台の歴史的背景や地域との関係性を重視する方向へと変化していることを示唆している。

域の持続可能性が言及される中で、観光への期待が地域側から高まっている。しかし、沿岸地域の多くは、かつての海上交通の要衝や漁場との関係で栄えたところも少なくなく、現在ではそれらの衰退とともに、僻地であると同時に観光地でもありながら、条件不利地域として扱われている。

そこで、今後の灯台観光の方向性としては、単なる「見る」対象から、「体験し、学ぶ」対象へとシフトすることが重要となってくるだろう。灯台へのまなざしが、体験型観光をとおした地域のストーリーと接続することで、地域へのまなざしと相乗効果を生み出すことが期待できる。地域の歴史や文化と結びつけたストーリーテリングを強化し、観光客が灯台を通じて地域のアイデンティティを理解できるような工夫をすることで、地域への経済波及効果の最大化や、関係人口の創出に一役買えるだろう。

引用文献

- 土井文博（2014）観光社会学の可能性—J.アーリの「まなざし」論を超えて—. 海外事情研究, 41(2), 11-40.
- JTBパブリッシング旅行ガイドブック編集部編（1994）太平洋の荒波が打ち寄せる灯台で有名な観光最東端の地。「るるぶ千葉房総」JTBパブリッシング, 96p.
- JTBパブリッシング旅行ガイドブック編集部編（1998）関東最東端の岬に灯台が立つ豪快で雄大な海の景色を堪能。「るるぶ千葉房総」JTBパブリッシング, 75p.
- JTBパブリッシング旅行ガイドブック編集部編（2000）銚子の海を見守る白亜の灯台。「るるぶ千葉房総」JTBパブリッシング, 96p.
- JTBパブリッシング旅行ガイドブック編集部編（2009）銚子電鉄・途中下車の旅。「るるぶ千葉房総」JTBパブリッシング, 77p.

- 須賀忠芳（2020）「観光歴史教育」の視座とその実践に関する考察—「観光のまなざし」からとらえる「歴史実践」の射程—. 社会科研究, 93, 1-12p.
- Urry, J. (1990) *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. Sage Publication.
- 加太宏邦訳（1995）「観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行」. 法政大学出版局, 328p.
- Urry, J. and Larsen, J. (2011) *Tourist Gaze 3.0*. Sage Publications. 加太宏邦訳（2014）「観光のまなざし増補改訂版」. 法政大学出版局, 446p.
- 安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著（2011）「よくわかる観光社会学」. ミネルヴァ書房, 224p.

心象風景・地域の象徴としての「灯台」

～シニックバイウェイ北海道 函館・大沼・噴火湾ルートでの取り組み～

“Lighthouse” as the Imagined Scenery and the Symbol of Local Area

-A Case Study for Utilizing Lighthouse in Scenic Byway Hokkaido - Hakodate-Onuma-Funkawan Scenic Byway -

阿部 正隆 -Masataka ABE- (国土交通省北海道局 (現在エドインバラ日本国総領事館))

中村 幸治 -Koji NAKAMURA- (一般社団法人北海道開発技術センター)

折谷 久美子 -Kumiko ORITANI- (シニックバイウェイ北海道 函館・大沼・噴火湾ルート)

[キーワード] 灯台, 地域資源, 観光振興

Keywords: Lighthouse, Local Resources, Tourism Promotion

はじめに

本稿は、シニックバイウェイ 北海道 函館・大沼・噴火湾ルート（以下、単に「ルート」とする）において、ルート内に点在する灯台を地域資源として活用するため、管理者である海上保安庁第一管区海上保安本部函館海上保安部のご協力も賜りつつ、現場視察を実施し、地域の関係者とともに、灯台のもつ資源価値について意見交換会を行い、その活用の可能性について検討した取り組みについて報告するものである。

シニックバイウェイ 北海道 函館・大沼・噴火湾ルートについて

シニックバイウェイ (Scenic Byway) とは、景観・シーン (Scene) の形容詞シニック (Scenic) と、わき道・より道を意味するバイウェイ (Byway) を組み合わせた造語である。地域に暮らす人が主体となり、企業や行政と手をつなぎ、美しい景観づくり、活力ある地域づくり、魅力ある観光空間づくりを行う取り組みとして、北海道において2005年よりスタートし、現在、北海道内に15の指定ルート、2つの候補ルートがあり、約500団体が活動をしている。(2025年1月31日現在)

このうち、函館・大沼・噴火湾ルートは、2006（平成18）年に5番目の指定ルートとなり、函館山と西部地区の歴史的街並み、津軽海峡の漁り火が美しい湯の川温泉郷、美しい自然に囲まれ、自然体験のプログラムを充実させている大沼周辺、北海道遺産にも指定されている内浦湾沿いの縄文遺跡群など、多彩な景観資源・地域資源を有する地域にある。そして都市景観から農村景観、漁村景観までを幅広く網羅していることから、それぞれの個性を發揮し、絆を深めていくことが大切と考え、景観、観光、自然・アウトドア、情報の4つの観点から目標を掲げて活動している。とくに、灯台に関しては「地域一人ひとりが地域資源の大切さを知り、それを活かす活動を追求する」という活動目標を踏まえ、近年、取り組みを進めてきている。

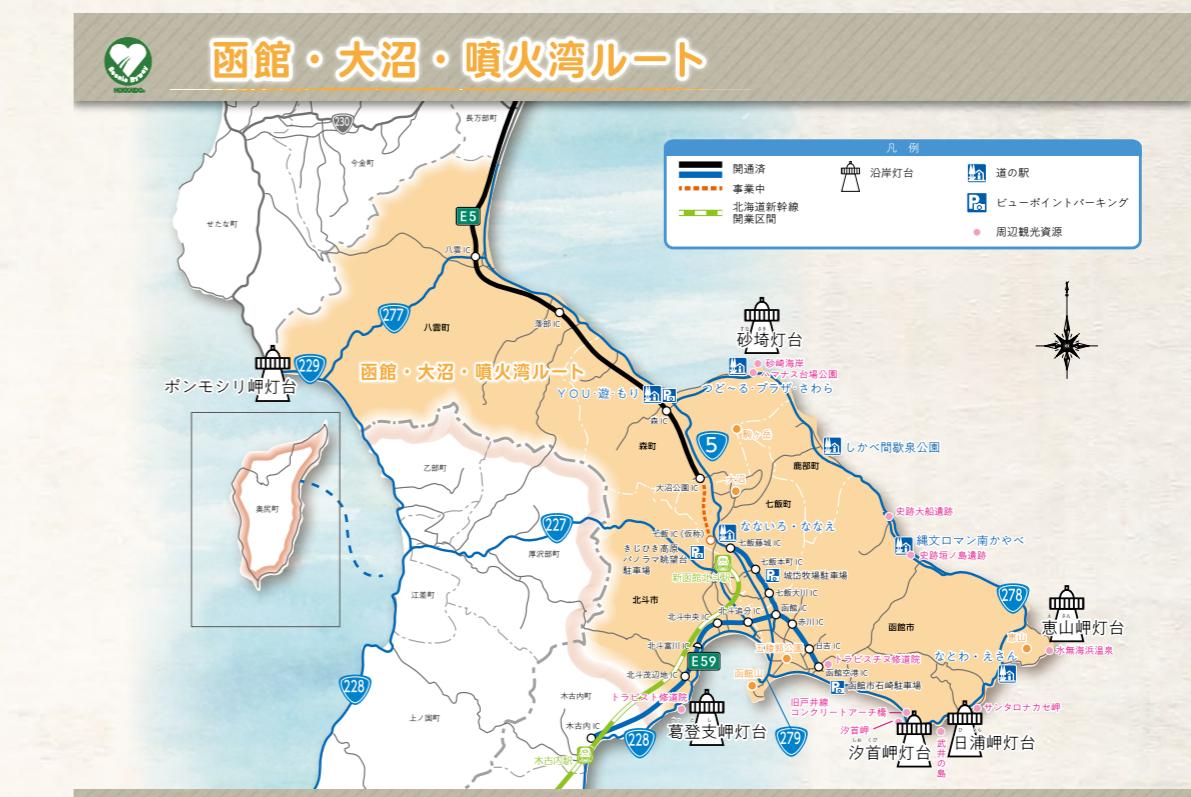


図1. ルート内の主要な地域資源と点在する沿岸灯台

現地視察「汐首岬灯台」「日浦岬灯台」

ルート内には複数の灯台が点在している（図1）。その中には、日本で唯一の第三等弧状不動十二面フレネルレンズを搭載し、道南地域において最も古い葛登支岬灯台（1885年12月15日初点）（図2及び3）や、かつては函館市灯台資料館（愛称：ピカリン館、2016.4.1より当面休館中）が併設されており、周辺が公園としても整備されていることから地域関係者による活用協議会の活動実績もある恵山岬灯台（1890年11月1日初点）（図4）など、すでに地域資源として一定の注目を集めている灯台も存在している。しかしながら、今回、ルート関係者による現地視察を実施するにあたっては、周辺状況からこれまで訪問者が気軽にアクセスすることが困難と考えられる現役の灯台2基を選定した。

現地視察については、2020年10月23日に函館海上保安部の案内のとおり、アクセス経路、建屋内部、登れる場合は灯火部、歩廊部を実際に踏査した。また周辺環境についても実際に訪問者として体感することを念頭に踏査を行った。とくに主対象として灯台を見る際の視点場や、灯台を視点場として、そこから眺める風景としての主対象や季節、時刻、天候、添景といった自然の動きにも着目した。

汐首岬灯台（1893年11月20日初点）については、灯器はすでにLB-40型に電動・自動化されており、建屋内部は主として発動発電機等が置かれているばかりであった。また周辺には灯台守の方々の居住区等があったと思われる建物の基礎等がわずかに残されているばかりであった。しかしながら、視点場として対岸に臨む下北半島を眺めることができ、とくに灯台の灯火部及び歩廊部からの風景には、視察当日はあいにくの悪天候であったが、いま・ここでしか味わえない津軽海峡の力強さを感じるものであった（図5および6）。

日浦岬灯台（1951年3月1日初点）については、漁港の突端に突き出た柱状節理の目立つ岩場の上に設けられており、アクセス経路についてはかなり手前から立入禁止とされていた。塔部に管制機材の付属屋があるばかりの灯台であるが、こちらの灯台も津軽海峡に面しており、多くのコンテナ船、フェリー等が行き交い、視点場として非常に興味深い場所であった。また主対象としての灯台で見ると、周辺の特徴的な柱状節理と背後の津軽海峡と一体となった風景はまさに地域を象徴する場所であった（図7および8）。



図2. 葛登支岬灯台内のレンズ 図3. 葛登支岬灯台 図4. 恵山岬灯台 図5. 汐首岬灯台の周辺状況 図6. 汐首岬灯台 図7. 日浦岬灯台 図8. 日浦岬灯台の周辺状況

現地視察を踏まえた意見交換会

意見交換会には、シニックバイウェイ北海道 アドバイザーミーティング委員長として、長年ご協力を賜っている筑波大学名誉教授 石田東生氏から心象風景としての「灯台」という観点から基調講演をいたしました。また筆者からは灯台の魅力、楽しみ方についての話題提供を行った。その後、現地視察も踏まえた意見交換を実施した。

意見交換の中では、とくに灯台の魅力について議論があり、大別すると①建築資産・歴史資産としての価値、②周辺を取り巻く厳しい自然環境、③かつての灯台守や灯台を頼りとした船乗りの物語の3要素があげられた。①については、建造物としての美しさやひとつとして同じものがない特別性、明治期からの日本の近代化を象徴的に示しており、建築のみにとどまらず、レンズや機械設備を含めて全体として技術史を伝える歴史性、さらには、それらが今なお現役で活躍しているということに価値を見出していた。②については、主に岬部等の険しい岩場等にあり、人の立ち入りを阻むような非日常的な環境に立地している隔絶性、そのような場所だからこそその現地に到達したことに対する達成感、遮るもののない絶景の視点場といった点に魅力を見出していた。③については、①と②の要素とも相まって、かつて灯台守の方々が全国を転々と苦労して生活

していた陸の側の記憶と周辺を海に囲まれている日本だからこそ、灯台を頼りとした船乗りの海の側の記憶に思いを馳せ、そのストーリー性に魅力を感じていた。これは「喜びも悲しみも幾年月」をはじめとした各種映画等の題材にもなっていることから明らかである。

しかしながら、こういった価値や魅力を有しているながら、地域に根ざした資源としての活用には至っていない。かつてのように灯台守の方々が常駐しているわけでもなく、施設は無人化しており、主たる機能を除けば、建造物そのものの老朽化も進んでおり、一般公開を行うには施設の維持管理とともに現地の安全管理が課題となった。

とくに、全国においても16基しかない「のぼれる灯台」を目指すには、今回視察した汐首岬灯台においても昇降用通路や歩廊部の安全確保の観点から課題が大きく、そもそも建造物として構造から困難であると考えられた。一方で、その場所にしかない灯台の存在感とそこからの絶景は地域性を象徴するものであり、かつて灯台守をされていた方々のストーリーなども鑑みれば、唯一無二の地域資源として活用することは、観光振興、ルートの魅力向上にもつながることが期待される。

まとめ

今回の取り組みを通じて、ルート内の「灯台」に着目し、心象風景・地域の象徴としての「灯台」の魅力・価値に改めて気づかされた。今後の展開としては、①灯台そのものもつ魅力や価値の伝達（地域性／過去～現在までのストーリー）、②その場に行かなければ感じられない空間体験（場所性／唯一性のある景観及び風景）、③その場でしか得られない特別な体験の場（灯台という舞台装置をいかに演出するか）という観点から取り組みを進めていくこととしている。

このため、海上保安庁、燈光会などの灯台関係機関・団体との協力関係の構築は当然ながら、地域の関係者としては掃除や花植えなどの周辺環境整備、訪問希望者への案内などを役割分担し、できることの積み重ねから将来的な公開に向けた協働を視野に入れなければならないと考えている。今後はまず魅力・価値を多くの方に知ってもらうこと、過去～現在までのストーリーを掘り起こすことに注力していきたいと考えている。とりわけ、かつて灯台守をされていた方々のストーリーは心象風景として当時の地域状況を含めて響くものが多いと想定されることから、まずはその収集を急ぎたい。

謝辞

本取り組みの実施にあたり、ご協力を賜った海上保安庁第一管区海上保安本部函館海上保安部、国土交通省北海道開発局函館開発建設部のみなさまにこの場をお借りして御礼申し上げます。そして、この取り組みを先頭に立てて進められながら志半ばで逝去されたシニックバイウェイ北海道 函館・大沼・噴火湾ルート故 佐々木哲夫 前会長に感謝と敬意を表します。



「海と灯台学Journal」 執筆者紹介

※敬称略、五十音順に記載

特集



いけのうえ しんいち
池ノ上 真一 (1973年11月16日)

- 大阪府堺市
- 北海商科大学 教授
- 博士(観光学)
- 都市・地域計画、観光まちづくり、地域マネジメント
- ikenoue@hokkai.ac.jp

「技術の人間化」を理念とする芸術工学を学ぶ。竹富島や日本ナショナルトラストで観光を活用した地域づくりに従事し、北海道大学准教授を経て、現在は北海商科大学教授・日本海洋文化総合研究所代表理事。



いしむら とも
石村 智 (1976年6月22日)

- 兵庫県伊丹市
- 国立文化財機構東京文化財研究所 無形文化遺産部部長
- 博士(文学)
- 無形文化遺産、考古学
- ishimura-t6y@nich.go.jp

国内外において無形文化遺産の保護に資する研究に従事。また海の文化遺産についても造詣が深く、ミクロネシア連邦ナンマトル遺跡の世界遺産登録(2016年)にも携わった。



うちだ まさひろ
内田 正洋 (1956年1月8日)

- 長崎県大村市
- フリーランス(海洋ジャーナリスト)
- 水産学士
- 海洋リテラシー学
- kayakman@fd5.so-net.ne.jp

1982年~91年までバリ・ダカールラリーに出場。北南米大陸縦断、ユーラシア大陸横断を経験。台湾~九州、西表島~東京湾のシーカヤック遠征。近年では国立科学博物館の「3万年前の航海プロジェクト」に参加。



えさき きく
江崎 貢久 (1974年2月20日)

- 三重県鳥羽市
- 有限会社オズ(海島遊民くらぶ)
- 博士(水産経済学)
- 水産経済・地域経済・観光まちづくり
- mermaid@oz-group.jp

1997年家業の旅館海月を引き継ぎ、2001年エコツアーハイアット(有限会社オズ)を設立。伊勢志摩国立公園や鳥羽市エコツーリズム推進協議会会長に就任。漁業と観光の連携を手法に商品のブランド化を手掛ける。



えのもと みどり
榎本 碧 (1982年)

- 東京都
- 国立研究開発法人土木研究所 寒地土木研究所 地域景観チーム
- 博士(工学)
- 景観、土木史
- enomoto-m@ceri.go.jp

九州大学景観研究室兼任助教を経て、2018年4月より現職。九州や北海道を主なフィールドとし、景観、土木史、歴史的土木構造物の保存等に関する研究に取り組む。



かいづ
海津 ゆりえ (1963年11月11日)

- 東京都港区
- 文教大学国際学部
- 博士(農学)
- エコツーリズム
- kaizu@bunkyo.ac.jp

地域プランナーを経て2007年より現職。日本のエコツーリズム黎明期より調査研究に携わる。エコツーリズム、災害復興、ジオパークなどが専門。西表島、奄美群島、八丈島、宮古島、磐梯山エリアなどがフィールド。



くりはら けんいち
栗原 憲一 (1979年2月6日)

- 東京都多摩市
- 株式会社ジオ・ラボ 代表取締役
- 博士(理学)
- 層位・古生物学、博物館学(教育・展示)、科学コミュニケーション、ジオパーク
- k-kurihara@geo-labo.co.jp

2003~2015年まで三笠市立博物館で学芸員(古生物学)、2015~2019年まで北海道博物館で学芸員(博物館学)。2019年に株式会社ジオ・ラボを設立。「展示」を軸にした地域の様々なストーリーを掘り起こす活動を展開している。



たかつき すずよ
高月 鈴世 (1972年6月17日)

- 山口県下関市
- 下関市教育委員会
- 日本建築史
- takatsuki.suzuyo@city.shimonoseki.yamaguchi.jp

下関市教育委員会文化財保護課にて、下関市内の歴史的建造物の保存活用に取り組む。これまでに、六連島灯台・角島灯台の重要文化財指定のほか、重要文化財旧下関英國領事館の保存修理(2008~2014)を担当。

氏名 (生年月日)

- 出身地
- 所属
- 学位
- 専門
- メールアドレス

特集

たかの ひろやす
高野 宏康 (1974年4月6日)



- 石川県加賀市
- 小樽商科大学 客員研究員、地域レジエンス株式会社 代表取締役
- 博士(歴史民俗資料)
- 北前船学
- htakano2009gm@gmail.com

北前船の視点から日本の海洋文化の歴史を再発見するため、全国各地の北前船寄港地・船主集落を訪問し、調査研究を進めている。日本遺産をはじめ、北前船遺産を活かした様々なまちづくり事業に取り組んでいる。



はやし たつゆき
林 達之 (1968年10月16日)

- 愛知県常滑市
- 一般社団法人 美浜まちラボ
- 修士(教育学)
- hayashi@tac-net.ne.jp

美浜町立野間小学校に勤務していた2011年、総合的な学習の時間で児童と一緒に地元の野間埼灯台を調べたことがきっかけで灯台に関わる。その後、美浜まちラボに参加し、灯台の利活用に取り組んでいる。

ひらい たけふみ
平井 健文 (1985年6月26日)



- 栃木県宇都宮市
- 北海道教育大学函館校 講師
- 博士(観光学)
- 観光社会学、地域社会学、文化遺産研究
- thirai.imcts@gmail.com

炭鉱・鉱山の構造を中心とする産業遺産の観光資源化プロセスを研究する。対象地は赤平市(北海道)や朝来市(兵庫県)など。近年は、critical heritage studiesの理論研究や、樺太/サハリンの炭鉱労働者や石炭産業の研究にも取り組む。



ほしの ひろかず
星野 宏和 (1966年2月28日)

- 福井県福井市
- 海上保安庁 第九管区海上保安本部 伏木海上保安部
- 海上保安学校 灯台課程卒
- 海上保安庁交通系業務
- hoshino-n9808@milt.go.jp

海上保安学校灯台課程を卒業後、野島崎航路標識事務所(千葉県)を皮切りに、日本各地の航路標識を保守管理する部署や海上交通センターなどで海上保安庁の交通系業務に従事し、ライワークとして明治期の灯台を調査研究する。

あべ まさたか
阿部 正隆 (1986年2月23日)



- 岐阜県高山市生まれ、富山県富山市育ち。幼少期の一部をドイツ・イタリアで過ごす。
- 国土交通省北海道局参事官付(現在エディンバラ日本国総領事館 領事)
- 修士(工学)/技術士(綜合技術監理部門・建設部門)
- 道路・都市・地方計画
- masataka.abe@mofa.go.jp

2011年4月、国土交通省入省。これまで、とくに北海道開発、道路計画・調査等に従事。大学院生時代に通い詰めた広島県福山市鞆の浦との出会いから、常夜燈、灯台の虜に。息子たちには「燈」の字を用いて名付けた。



いしまる ゆき
石丸 優希 (1988年12月1日)

- 北海道札幌市
- うさぎ設計
- 修士(建築都市計画学)
- コミュニティの懐に入ることから始めるまちづくり
- yu-ishimaro@gmail.com

北海道大学大学院修了後、北海道庁で建築技術職に従事。結婚を機に退職し、引越し先の山梨ではオーガニックファームのイベントサポートや古民家コミュニティスペースの管理に携わる。現在、札幌市で子育てをしながら都市計画やまちづくりのプロジェクトに従事。

おりたに くみこ
折谷 久美子 (1959年12月11日)



- 北海道函館市
- シーニックバイウェイ北海道函館・大沼・噴火湾ルート事務局長
- 特定非営利活動法人スプリングポートユニティ21理事長

1999年、誰もが気軽にまちづくり活動に参加できる団体を発足。2004年法人化。春から秋は植栽維持、冬季は手作りワックスキャンドルで国道や観光施設等を灯す「シーニックdeナイト」を実施。2025年2月に20年目を迎えた。



ちりがん ゆき
其力千 (1996年12月17日)

- 中国内モンゴル自治区
- 北海商科大学大学院 商科研究科修士1年生
- 学部(観光学)
- 観光学
- 22450018@hokkai.ac.jp

持続可能な観光マネジメントを学び、CBTを通じた『持続可能な観光モデル構築』をテーマに研究中。『観光で地方を元気に』が目標です。

なかむら こうじ
中村 幸治 (1976年10月26日)



- 北海道虻田郡留寿都村
- 一般社団法人 北海道開発技術センター 調査研究部 次長
- 修士(工学)/技術士(建設部門)
- 道路景観、観光地域づくり、まちづくり
- k-nakamura@decnet.or.jp

シーニックバイウェイ北海道「函館・大沼・噴火湾ルート」コーディネーター。「生まれ育った地域への恩返し」をモットーに、人々資源をつなぐ付加価値の創出に向けた地域づくりの企画提案・実践を行っている。



なかむら しんすけ
中村 真介 (1985年)

- 神奈川県横浜市
- 株式会社ジオ・ラボ
- 修士(農学)
- 地理学、森林科学
- nakamura@geo-labo.co.jp

白山手取川ジオパーク専門員として活動、白山ユネスコエコパーク拡張登録に貢献。ユネスコジャカルタ事務所を経て、東ティモール史上初のユネスコ無形文化遺産登録に貢献。現在は地域コンサルティングに従事。

新たな灯台利活用 モデル事業

事業の
認知向上
により
27件
の応募が集まり
全国15地域で取り組み
を実施



海と灯台利活用 チャレンジ企画事業

「新たな灯台利活用モデル事業」の
入門編となる助成事業を開始

15件 5事業
の応募があり を実施



作家との連携による 灯台価値の創出

人気作家6人による
灯台紀行エッセイをまとめた
書籍「灯台を読む」を刊行

初版5,000部



「海と灯台学」研究

様々な分野の専門家による
研究者ネットワークを構築

17トピック
で構成される

「海と灯台学ジャーナル」を発行



海と灯台 プロジェクト 2024 年度の 取り組み

人と 常に灯台を境 海は、 に関わってきた。

日本初の西洋式灯台点灯
灯台の役割と価値を改めて見直

2020年に始動した「海
こうした流れを全国に広げ、持
多彩な取り組み

から150年以上経過した今、
そうとする機運が高まっている。
「海と灯台プロジェクト」は、
続的なムーブメントとするため、
を展開している。



海と灯台 ウィーク2024

海上保安庁や自治体などと連携し
全国で灯台に関連した
イベントを実施

動員7万人以上

ポスターに使用する
キャッチコピーを公募

全国から4,737件



海と灯台サミット2024

「灯台で○○やってみた」人たちが集結し
事例発表や提言を行うシンポジウムなどを開催

会場202人 オンライン290人 が参加

「海と灯台プロジェクト」

「灯台」から見渡す海は、
壮大なスケール感をもって広がっています。
そして人と海は、時間的にも、そして空間的な意味においても、
「灯台」を境としていつも関わりを持ち続けてきました。
それゆえに我々は、自然的、社会的、歴史的な文脈から遮断して
「灯台」を語ることは決してできないのです。
そればかりでなく、逆に「灯台」を通じてこそ、
日本の海洋文化史の奥深い世界を
伝えることができるのではないかでしょうか。
そのように、「灯台」を中心に地域の海の記憶を掘り起こし、
地域と地域、日本と世界をつなぎ、
これまでにはない異分野・異業種との連携も含めて、
新しい海洋体験を創造していく——それが「海と灯台プロジェクト」です。



海と灯台プロジェクト

主催:一般社団法人海洋文化創造フォーラム
共催:日本財團 海と日本プロジェクト



海と灯台学ジャーナル 創刊準備号
2025年3月発行

編集:一般社団法人日本海洋文化総合研究所
発行:一般社団法人海洋文化創造フォーラム